

2015 Annual Report

一般社団法人 Colabo | 2015年 活動報告書

「すべての少女に衣食住と関係性を。
困っている少女が暴力や搾取に
行きつかなくてよい社会に」を合言葉に、
中高生世代を中心とする
女子を支える活動を行っています。

Colabo

「すべての少女に衣食住と関係性を。
困っている少女が暴力や搾取に
行きつかなくてよい社会に」を合言葉に、
中高生世代を中心とする
女子を支える活動を行っています。

私たちの想い

高校時代、私は渋谷で月25日を過ごす“難民高校生”でした。家族との仲は悪く、教員ともうまくいかず、街を彷徨っていた私は当時、「自分にはどこにも居場所がない」と思っていました。街には同じような想いを抱えて集まっている人がたくさんいました。ファーストフードや漫画喫茶、居酒屋、カラオケの他、ビルの屋上に段ボールを敷いて一夜を明かしたこともありました。当時の私や友人たちは、家庭にも学校にも居場所をなくした“難民”でした。

そうした青少年少女が、見守る大人のいない状態で生活するようになると、危険に取り込まれやすくなります。心身ともにリスクの高いところで搾取される違法の仕事、未成年の少女たちの売春斡旋や、暴力、予期せぬ妊娠や中絶など、目をつぶりたくなるような現実を、私はたくさん目にしてきました。友達を助けられないこともありました。

高校を中退し、このままでは生活できない、どうすればよいのだろうと悩んでいましたが、頼ったり、相談したりできる大人はいませんでした。そんな私に声をかけてくれるのは、買春者か、危険な仕事に斡旋しようとする人だけでした。それ以外に、自分に関心を寄せてくれる大人はいないと感じていました。

それから約10年が経ち、26歳になった私も「大人」と言われるようになりました。今でも、そうした青少年少女に路上やネット上で声をかけるのは、多くが手を差し伸べる大人ではないのが現状です。

「大人はわかってくれない」「大人は信用できない」という声には、「向き合ってくれる人がいない」「信じてくれる人がいない」という想いが込められているのではないのでしょうか。必要なのは、特別な支援ではなく、「当たり前」の日常です。

私たちは、出会う少女たちの伴走者となり、共に考え、泣き、笑い、怒り、歩む力になりたいと思っています。すべての少女が「衣食住」と「関係性」を持ち、困難を抱える少女が暴力を受けたり、搾取に行きつかなくてよい社会を目指して活動を続けます。

2016年5月
一般社団法人Colabo
代表 仁藤夢乃



夜間巡回・相談事業

深夜の街を巡回し、帰らずにいる少女に声をかけ、繋がっています。
また、HPやSNSなどを通して全国から寄せられる相談のついでです。

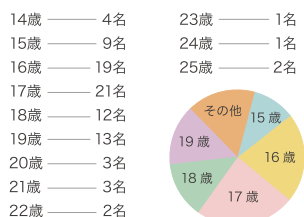
夜間巡回 相談者数
18.121名



相談者の属性と現状

・本人からの相談 —— 90名(女子84名、男子6名) うち、新規相談者62名
・本人以外からの相談 —— 31名(友人13名、母親4名、医師1名、教員3名、スクールソーシャルワーカー1名、その他支援者12名)

■年齢(本人からの相談)

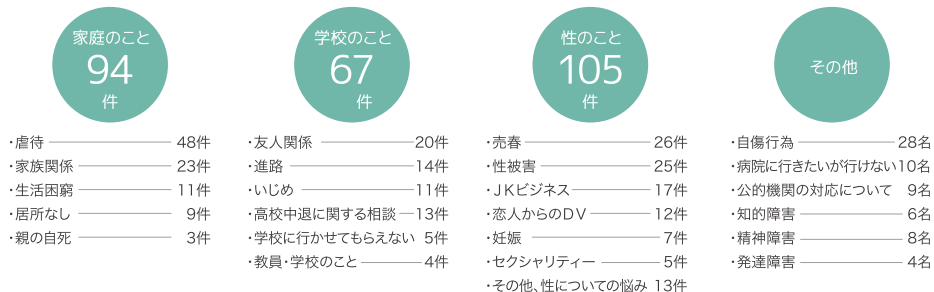


■出会ったきっかけ

| | |
|----------------------|-----|
| ・SNSを通して | 42名 |
| ・友人の紹介 | 17名 |
| ・仁藤が高校の授業に来たことや講演 | 17名 |
| ・支援者・知人の紹介 | 12名 |
| ・街やSNSでスタッフから声をかけられて | 11名 |
| ・テレビ、新聞をみて | 6名 |
| ・HPをみて | 6名 |
| ・仁藤の著書を読んで | 5名 |
| ・企画展サイトをみて | 4名 |

相談は全国から寄せられ、東京、神奈川、千葉、埼玉を中心に、北海道、宮城、福島、栃木、群馬、茨城、長野、静岡、愛知、滋賀、京都、大阪、和歌山、福岡、熊本、宮崎、長崎、沖縄などで少女たちと出会い、関わっています。

■相談内容



家族からの暴力やネグレクトなど、虐待に関する相談が48件。中でも、児童福祉につながった経験を持ちながら、適切に対応されなかったことから不信感を抱く少女たちとの出会いが続いています。相談者に「児童相談所と関わったことはある?」と質問すると、「あんたもそっちの人間か」と厳しい目つきでバリアを張るような様子を見せたり、夜の街で声をかけたとき「保護じゃないよね?」と怯えた表情で言われたりしたこともあります。安心して過ごせる場所を持たないまま、な

んと生き抜こうとする中で、危険に巻き込まれた少女たちと毎年多数出会っています。性被害や性的搾取の被害に遭った少女たちは、安全を手に入れてからもトラウマや精神的な不安を抱えて生きています。そのため、一時的、緊急的な支援だけではなく、中長期的なサポートや暮らしづくりを支える活動を大切にしています。生活が困窮し、家庭が福祉に繋がっているにもかかわらず、虐待があり、うわばきや文具を親に買ってもらえない、給食費や修学旅行費が払え

ないなどの理由から売春していた中学生にも複数出会いました。親の目や暴力を気にして「親の都合で学校に行かせてもらえない」、親に怒られるから「病院に行かせてもらえない」という相談や、「ガスや電気が止まっている」「保険証が切れて病院に行けない」「親が家に帰ってこなくなった」「認知症の祖母と二人暮らしをしているが、祖母を殺してしまおう」という相談もありました。必要に応じて、行政や児童相談所への同行や、学校など他機関との連携を行っています。

少女たちの伴走者に

少女たちはいくつかの問題を複合的に抱えています。困っている人の一番の困りごとは、「助けて」と言えないこと。「あなたはどうしたい?」と問われても、それがわからないことです。混乱した生活の中、落ち着いて考えられる環境や、一緒にものごとを整理してくれる人との信頼できる関係性や体験があつて初めて、自分の状況に向き合うことができます。私たちは、食卓を囲む時間や体験を共有し、何気ない日常を積み重ねることで互いを知り、困った時に頼れる関係を築きたいと考えています。半年以上密に関わつて初めて、性的虐待の被害にあっていることを話してくれる人もいます。ほとんどの場合、抱える問題はすぐに解決できるものではありません。だからこそ、長い目で付き合ひ、ともに喜びや苦しみを分かち合い、泣き、笑い、怒り、共に歩める伴走者でありたいと活動しています。



相談を受けた少女への対応

■面談：141回

・本人との面談 —— 125回
・その他関係者との面談 —— 16回



■同行支援：106回

| 同行先 | 警察 |
|---|---------------|
| ・各種手続き・買い物 —— 16回 (住所変更、携帯電話や家具家電の購入、郵便局など) | 5回 |
| ・不動産 —— 13回 | ・法律相談 —— 4回 |
| ・市役所 —— 10回 | ・学習会・研修 —— 4回 |
| ・病院 —— 10回 | ・学校 —— 4回 |
| ・児童相談所 —— 9回 | ・里親家庭 —— 3回 |
| ・進学先・就労先探し —— 7回 (学校・職場見学、ハローワーク) | ・卒業式 —— 3回 |
| ・面談 —— 12回 (ケースワーカー、教員、児童相談所、大家、シェルター入居面談など) | ・引越 —— 2回 |
| | ・家庭 —— 2回 |
| | ・成人式 —— 1回 |
| | ・児童養護施設 —— 1回 |

■他機関連携：57件

| |
|---------------|
| ・弁護士 —— 18件 |
| ・児童相談所 —— 16件 |
| ・行政 —— 6件 |
| ・警察 —— 5件 |
| ・学習支援 —— 4件 |
| ・病院 —— 3件 |
| ・学校 —— 2件 |
| ・民生委員 —— 2件 |
| ・着付け —— 1件 |

■同行支援から見てきたこと

必要に応じて家庭や警察、病院、児童相談所等への同行支援を行っています。少女自身が詳細に被害や状況を訴えられなければ、支援を受けることが難しい現実があります。しかし、子どもたち自身が「助けて」と訴えることは容易ではなく、勇気を出して相談しても対応されず、大人を信用できなくなっている子どもがたくさんいます。

相談者の状況によって、アドバイスや他機関に繋ぐなど、一時的な対応で問題が解決するケースもあれば、中長期的な支援が必要な場合もあります。頼れる家族がいなかったり、親族から身を隠して生活しなければならない状況にあつたりする場合には、日常的な支援が大切になってきます。生活に関する相談やトラブル対応、病院への同行、大家への挨拶、洗濯や掃除、食品の保存方法、服薬管理や貯金、進学や就労に関するアドバイスなど、生活全般を見守っています。



食事・物品提供

少女たちと食卓を囲む時間を大切にしています。十分な食事を取ることができていない少女や、誰かと食卓を囲む機会がなく、孤食を続けている少女と料理をし、出会いや関わりの場をつくっています。

食事提供回数

衣類・物品の提供

195. 128.

応募者の方からいただいた衣類、文具、生活用品、化粧品、入浴剤、食品などを少女たちに贈っています。

「一緒にご飯を食べよう」その一言から始まります。

困っている人の一番の困りごとは「助けて」と言えないことです。非行や家出をくりかえしていたり、困難を抱えたりしている少年少女の多くは、「自分の問題なんだから、自分でなんとかしなきゃ」「周りを巻き込みたくない」と強い気持ちを持っています。その結果、ひとりではどうにもならない事態にまで発展しているケースもあります。

私たちは、そんな少女にまずは「一緒にご飯を食べよう」「今度ご飯食べにおいでよ」と声をかけています。共に料理をし、食卓を囲み、笑いあい、互いの話をし、関係性をつくっています。

鍋など大勢で食べる料理を食べたことがない、誰かが料理している所を見たことがないという少女もいます。ある時、父親と2人暮らしをする15歳の少女とお好み焼きを食べた時「こんなちゃんとした手料理を食べたのは7年ぶり」



と話してくれました。生活保護を受けながら母親と暮らす少女の家には炊飯器もお米もないことがわかり、物資の支援に繋いだこともあります。食事後にシンクに並んで洗い物をしていると「お母さんとこういうことが出来る家にうまれたかったな」と、つぶやく女の子もいます。

食事の場は「相談する」ことへのハードルを下げることもつながります。困った時に「相談したいです」と申し出るのは、誰にとっても簡単ではないでしょう。そんなとき、女の子たちは「そろそろご飯したいです」と連絡をくれたり、こちらから誘ったりしています。

「大人はわかってくれない」という言葉の裏には、「向き合ってくれる大人がいない」という想いが込められているのではないのでしょうか。必要なのは、特別な支援ではなく、当たり前の日常だと考えています。

私たちは食卓を囲むことを通して、困ったときに、できれば事態が深刻になる前に相談できる関係性、彼女たちがいつでも戻ってこられるホームの1つとなればと活動しています。



地方や児童福祉施設などで暮らす少女に7年に数回物資を送っています



応募者の方からの衣類で全身コーディネート



「いただきます」と言ってからご飯を食べたり、みんなと一緒に人生で初めてのピクニックに行ってきたり…。「誰かと一緒に笑いながら話すこと」すら普通にできなかった私には、Colaboと出会ってから新しい体験ばかりでした。Colaboや支援してくださる皆さんがいて、とても幸せに思っています。高校を卒業したら、私が女の子の力になれば…支援できる立場にも、少しずつなれたらいいなと思っています。(18歳・高校3年生)

一時シェルター

虐待や性暴力被害から、安心して過ごせる場所がない少女が、一時的に過ごすことのできる場所として運営しています。今日一夜を過ごすことができる場所がない、帰れるところがないという少女が利用しています。

2015年、みなさまからのご寄付で開設できました！

利用者 仮眠、シャワー、食事、居場所、学習支援など

宿泊者

18. 158. 11. 56.

体を休め、落ち着いて考えられる場所を

安心して眠れる場所がないとき、困るのは、泊まれるところがないこと。「家にいられないとき、声をかけて来るのは体目的の男の人だけだった。そういう人しか自分に関心を持たないと思っていたし、頼れるのはそういう人だけだった」とある中学生が言いました。

2011年の団体設立から2015年夏までは、行き場を失った少年少女たちを代表仁藤の自宅に泊めていました。複数のスタッフで少女たちを見守れる、少女たちが気軽に立ち寄れる場所を作ろうと、シェルター開設のためのご寄付を募り、開設することができました。「今の状況を変えたい」と思っている人の他、公的な保護に繋がらないことを嫌がりながらも「今日は安心して過ごせる場所がない」という人や、家出し知らない人の家を転々とする生活を続けながらも「今日は休みたい」という人も使える場所として運営しています。

物件を借り、開設準備をしていた2015年6月、学校関係者から一本の連絡がありました。シェルター開設の噂を聞いた中学生が、「Colaboに住む」と言っているとのことでした。彼女は虐待を受け、家を飛び出して一週間ホームレス生活を送っていました。シェルターは一時的な避難場所として、暮らせる場所ではないこと、まだ準備中であることを伝え、彼女に会いに行きました。数日間Colaboで保護し、学校や児童相談所とやり取りをしながら公的な保護に繋がることができました。その間、彼女はシェルターの開設準備や床張りを手伝ってくれました。今でもサポートグループの活動に参加するなど、日常的なかわわりを続けています。

これまでシェルターを利用した少女の中には、里親のもとで生活をはじめたり、自立援助ホームに入所したり、一人暮らしを始めた人もいます。しかし、未だ安定した生活を手に入れられずにいる人も少なくなく、2016年度から、自立を目指す10代後半～20代前半の女子のためのシェアハウスを始めることにしました。特に、18歳を超え、児童福祉の対象ではなくなるものの、未成年で自らの家賃契約ができない人や、一般的な借家の初期費用の用意が困難な状況にある人、精神的な不安や障害などから一人暮らしが難しい人、これまで定まった家での「暮らし」を経験したことがないことから生活スキルに不安がある人、アルバイトをしながら高校卒業や進学を目指す人、児童福祉の対象年齢でありながら、公的機関の支援へ強い拒否感を持っていたり、これまでの経験から福祉施設での生活が難しい人などに利用してもらえる場になりたいと考えています。



Colaboに出逢った頃の私は、寝泊まりできる場所を求めて転々としていました。

「支援者」が大嫌いで、大人が信じられなくて、夢乃さんに初めて会う時も強気で緊張して、正直「どうせまた嫌な大人が来る。それで絶望したら今度こそ死んでやろう」と思いながら約束した場所へ行きました。でも、夢乃さんはこれまで出会ってきた大人とは違う関わり方で、真剣に私と向き合ってくれました。一緒に頑張っていこうという気持ちが言動から伝わってきて、信じてみようかと徐々に思えてきました。

当時、ホームレス状態だったので、Colaboのシェルターに宿泊することになりました。シェルターはまだ開設準備中だったので、物資で溢れ返っていましたが、少しずつ片付けをしながらどんどん快適になっていきました。食べ物を始めとした、たくさんの支援に支えられました。

役所で生活保護の申請をすと「現地保護はできない」と断られそうになりましたが、弁護士さんがついてくれて、Colaboが家探しも一緒にしてくれ、新しい生活を始めることができました。そして、この春高校を卒業することもできました。今はまだ不安定な日もありますが、誰かと一緒にご飯を食べたり、他の女の子たちと過ごしたりする中で、家族とは血縁だけじゃない、困った時に手を差し伸べてくれる人がいるんだと感じられ、その事実を支えられながら今日も生きようと思っています。(20歳)